

上田 敏（東京大学教授）著

リハビリテーションの思想 人間復権の医療を求めて

砂原茂一（国立療養所東京病院名誉院長）

これは著者がリハビリテーション（リハと略す）の理念を扱った2番目の著書である。前著“リハを考える”ではいささか肩肘を張っていたし、理論が理論として扱われていた趣があったが、本書では理論がいちいち具体的な事実、事例によって豊富かつ適切に裏打ちされているから、大変理解しやすいだけでなく、直ちに日常診療の指針として役立つと思われる。理論を扱いながら同時に実用書としても有効に機能するというのは著者の腕前であろう。油の乗り切った、臨床の修羅場で縦横に活躍をつづけている実践家の著書には理論を説いてもそれだけの臨場感があふれるものである。

著者はいわば PT+OT+ST≠リハ医学という公式を呈示して、陥りやすい技術主義に警告を与えたとともに、一般医+家族+看護婦≡リハ医学というもう一つの公式を呈示して、リハの裾野をひろげる必要を説いている。本書がいわゆるリハ専門家の陥りやすい誤解、誤認識を正し、その頭の整理

に役立つことを期待するとともに、リハの周辺の人々、あるいは今までリハに無縁であった人々を巧みにリハの理解・関心に導く手引書としても大いに役立つことを願わずにはいられないのである。

読みやすく分りやすい啓蒙書であるが、リハの日常臨床の場で行くわすあらゆる問題を取上げ、多角的な考察を加えた問題提起の本でもあり、ある意味で挑戦的な本であるから、リハ医学専門家だけでなく一般医療関係者やリハ医学以外のリハ関係者にも広く読まれ今後のわが国のリハ発展の跳躍台となるであろうことを期待したい。

一読して多少引っかけた事柄をあえてあげると、まず PT や OT にはきびしいが医師にはいささか甘すぎないかということである。現代わが国におけるリハ医学についてのいろいろな誤訳、誤解の責任はむしろ医師が負うべきものではないであろうか。著者は都市型リハといういささか奇妙な概念を持ち出しているが、本来リハ

医学に都市型、田舎型があるべきではなく、むしろ存在するのはリハ体制の日本型歪みなのではないのか。戦後われわれはわが国に新しくリハ医学を導入するにあたって、いわゆるマッサージと温泉地からの切り離しを強く主張したはずであるが、前者はともかく、後者は最近までほとんど全く無視されて著者のいう温泉型、むしろ日本型というべきゆがんだリハシステムがひろがってしまったのであるが、その責任の大半は医師たちの誤った認識（とそれの行政への反映）に帰せられるべきであろう。近頃やかましい看護婦問題についてもそうであるが、医療の世界の超越的権威としての医師の責任がきわめて大きいことを見逃してはなるまい。都市型・温泉型というように並べられるとどちらか好む方をとればいいかのような誤解をまねきかねないが、いい双六の振出しはつねに地域の医療機関における早期リハであり、二者択一的なリハのシステムなどがあるべきいわれがないし、著者も当然そのように考えていられるはずであるから、ことさらに都市“型”などというまぎらわしい言葉は使われぬ方が賢明ではないであろうか。妄言多謝。

（A 5，頁 152，¥1,400，〒 300，1987，医学書院 刊）